プログラム

会長挨拶 …… 早野　龍五

弦楽アンサンブルのためのワルツ ニ短調 …… 鈴木　鎮一

ピアノ協奏曲 第12番 イ長調 KV414 …… モーツァルト

ヴァイオリンとヴィオラのための協奏交響曲 変ホ長調 KV364 …… モーツァルト

キラキラ星変奏曲 …… 外国民謡　鈴木　鎮一

鈴木鎮一　作曲　*Shin'ichi Suzuki　(1898 — 1998)*

弦楽アンサンブルのためのワルツ ニ短調

スズキ・メソードによる才能教育運動の創唱者　鈴木鎮一は1898年名古屋に生まれ、安藤幸のもとでバイオリンを学んだ後、1920年にドイツに渡り、ヨアヒムの門弟カール・クリングラーのもとで８年間バイオリンを学んだ。

この「ワルツニ短調」は1928年、ワルトラウト夫人とドイツで挙式した年の作品。ベルリンで生まれ育った夫人にとっては、若き日の舞踏会を偲ばせる思い出の曲でもある。

翌年帰国した鎮一は、弟の章（ヴィオラ）、二三雄（チェロ）、喜久雄（ヴァイオリン）と鈴木カルテットを結成し、室内楽を広く紹介した。

また、東京弦楽団は、鈴木カルテットと鎮一の門下生、そして自身が教授を務めた帝国高等音楽学校の学生で構成され、国内と海外で、放送を含め活発な活動を行った。その演奏日誌には、1940年に2回、同曲が演奏されたことが記されている。

モーツァルト　作曲　*Wolfgang Amadeus Mozart　(1756 — 1791)*

ピアノ協奏曲 第12番 イ長調 KV414

ザルツブルクの大司教コロレドと訣別し、ウィーンに活動の拠点を移したモーツァルトが、自ら主宰した予約演奏会で初演した3つのピアノ協奏曲（第11番～13番）のうちのひとつで、3つのうちで最初に書かれたものであると考えられており、1782年の秋頃にウィーンで作曲された。モーツァルトはそれまでピアノ協奏曲の分野から3年～5年程遠ざかっていたが、ウィーンにおける音楽活動の主柱となった予約演奏会によって、以後、ピアノ協奏曲を継続的に作曲していった。

モーツァルトは手紙でこう書いている。「この協奏曲は難しすぎるものと易しすぎるものの中間である。非常に絢爛としているが、耳には快く聞こえ、空虚に陥ることなく自然である。音楽通は勿論、そうでない人もなぜだか満足できる。」

第１楽章（アレグロ、イ長調）は、ウィーンの社交界デビューにふさわしい明るさと伸びやかさ、そして華麗さを備えた楽章。ピアノは楽章を通して主導的に活躍する。

第２楽章（アンダンテ、ニ長調）は、この曲を書く直前に亡くなったヨハン・クリスティアン・バッハのオペラ『魅惑の女』序曲から主題を流用している。モーツァルトは同年4月10日付の父レオポルトへの手紙で「音楽界にとっての損失」だと書いて彼の死を惜しんでおり、彼なりの追悼の表れだといわれている。

第３楽章（ロンド-アレグレット、イ長調）は、軽やかで楽しく生き生きとした、親しみやすい楽章である。

モーツァルト　作曲　*Wolfgang Amadeus Mozart　(1756 — 1791)*

ヴァイオリンとヴィオラのための協奏交響曲 変ホ長調 KV364

1777年～79年のマンハイム・パリ旅行において、モーツァルトは新しい活動の地を得ることには成功しなかったが、音楽的には多くの収穫を手にした。この作品はザルツブルク帰郷後の豊作期に生まれた最高傑作の一つである。協奏交響曲という形式はロンドンやパリで一時期大流行し、パリの影響が大きかったマンハイムでも大いに流行っていた。複数の楽器の独奏による協奏曲をこのように呼ぶのであるが、同時に協奏曲と交響曲を合体させたものというニュアンスもある。また、独奏パートは高く評価され、今日ではヴァイオリン・ヴィオラによる二重協奏曲として演奏される傾向にある。

第１楽章（アレグロ・マエストーソ、変ホ長調）は、幸福感にあふれた快活なアレグロ。作曲者自身によるカデンツァ（ソリストが技巧を披露する即興的部分）が見事である。

第２楽章（アンダンテ、ハ短調）は、一転して悲痛なムードが支配する、陰影豊かな叙情楽章。

第３楽章（プレスト、変ホ長調）は、喜びが弾ける華やかなフィナーレ。モーツァルト独特のロンド形式となっており、冒頭の主題は二度回帰する。

豊田耕兒　ヴィオラ・指揮

1933年、浜松市に生まれる。幼少より鈴木鎮一先生に師事。1952年、フランス政府給費留学生としてパリ国立高等音楽院に学ぶ。音楽院を1年で卒業後、ジョルジュ・エネスコ、アルテュール・グリュミオーに師事。ハリエット・コーヘン財団よりバッハ賞受賞。ロン・ティボー、ジュネーヴ、エリザベート王妃国際音楽コンクール入賞。ライン室内楽団第一コンサートマスターを3年間、ベルリン放送交響楽団の第一コンサートマスターを17年間、ベルリン国立芸術大学ヴァイオリン科教授を21年間務める。その間、ベルリン市よりカムマー・ヴィルトゥオーズの称号を受ける。グリュミオー弦楽四重奏団メンバーおよびディートリヒ・フィッシャー＝ディースカウとのアンサンブル。ベルギー・ヴァロニー夏期国際アカデミーのヴァイオリン講師を務める。草津夏期国際音楽アカデミー＆フェスティヴァル創立、初代音楽監督および群馬交響楽団の音楽監督、ドイツ・ミヒャエルシュタインおよびデュッセルドルフの夏期講習のヴァイオリン講師を歴任。1999年より国際スズキ・メソード音楽院校長、才能教育研究会会長および芸術監督を歴任。現在、国際スズキ協会会長、才能教育研究会名誉会長。

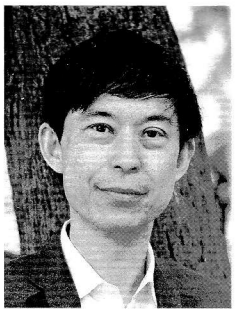
鈴木秀太郎　ヴァイオリン

1941～44年、鈴木鎮一先生に、東京用賀のお宅で手ほどきを受け、その後、鷲見三郎、パウル・クリンゲルに師事。桐朋学園高校音楽科を経て、カーチス音楽院に留学。エフレム・ジンバリストに7年間学んだ。第20回全日本音楽コンクールでの大賞受賞をはじめ、チャイコフスキー、エリザベート、モントリオールの各国際コンクールでも上位入賞に輝き、1961年より、ピアニストのゼイダ夫人とともに世界各地で演奏活動を行なっている。

オーケストラのコンサートマスターとしては、ケベック交響楽団で16年間、インディアナポリス交響楽団で27年間務め、同時に独奏者としてもNHK交響楽団、東響、読響、日本フィル、東京都響、大阪、京都、名古屋、札幌、九州の各オーケストラ、香港、モスクワ、レニングラード、ミンスク、パリ、ブリュッセル、トロント、モントリオール、インディアナポリス、ケベック、ハバナ、その他数多くの交響楽団と長年にわたり共演してきた。また、指揮者としても、ケベック、インディアナポリスで定期的に活動を続け、日本でも東響、読響、札響、また、香港フィルとも共演している。

教師としては、ケベック州立音楽院、ラバール大学、インディアナポリスのバトラー大学音楽部などの教授を務め、インディアナポリスでは、SUZUKI AND FRIENDSという室内楽コンサートシリーズを組んで、25年以上の永きにわたり、ゼイダ夫人とともに主軸奏者として活躍。このシリーズには、堤剛氏、竹澤恭子氏などがゲストとして参加している。

これらの幅広い音楽活動の成果を認められ、インディアナポリス市からは、ゼイダ夫人とともに文化奨励賞を授与された。現在もリサイタルや室内楽を通して、マルボロ、グランド、テトン、ストラトフォードなどの音楽祭でも活動を続けている。



東　誠三　ピアノ

5歳より「スズキ・メソード」片岡ハルコ氏のもとでピアノを始める。東京音楽大学付属高校から東京音楽大学に進み、1983年、第52回日本音楽コンクール第1位。卒業後、フランス政府給費留学生としてパリ国立高等音楽院に留学。数多くの国際コンクールに優勝・入賞し、演奏活動に入る。国内はもとより、ヨーロッパ、北米などでリサイタル、オーケストラと共演。1998年、第24回ショパン協会賞を受賞。CDはセイコーエプソンより多数発売。2008年より福島・三春交流館「まほら」にて開催されたベートーヴェン：ピアノ・ソナタ全曲演奏会シリーズは好評を博し、そのライブ録音CD全9集はいずれも高い評価を受けている。2012年にはジュネーヴ国際音楽コンクール・ピアノ部門審査員を務めた。現在は活発な演奏活動とともに、東京藝術大学教授を務めるほか、東京音楽大学でも後進の指導を行なっている。才能教育研究会ピアノ科特別講師。

甲信地区指導者弦楽団／指揮　臼井　紳二

1st ヴァイオリン	2nd ヴァイオリン	ヴィオラ	チェロ	オーボエ	スタッフ
◎五島美佳	外山陽子	花岡さやか	北沢加奈子	※山崎智幸	小幡　毅
坂本七美	酒井玲子	井上悠子	川手由紀	※畑中悠子	増澤治雄
清水きよみ	佐々木孝子	小幡あつみ	塚尾桃子		李　龍春
伴野きよ子	中島玉絵	佐々木衣子	原　香恋		
野口麻紀	花村祐美	宮下朱里		ホルン	総括
日向野忠音	山本英子	河西好江	コントラバス	※青木孝學	降旗みすず
平波華映	島野ロンダ	小出倫代	※柳沢日出夫	※奥原由依	
		宮下理恵			

松本室内合奏団（※賛助出演）